

松山ベテル病院より

「キリスト教によって
生み出される新しい医療」

佐々木真理牧師
医療法人聖愛会チャプレン



「私たちは、キリスト教の『愛の精神』を基本理念として、ホスピス精神を大切にしたい全人的なケアの実現を目指します。」 - 松山ベテル病院 基本理念 -

松山ベテル病院を紹介する機会をいただき感謝いたします。当院は基本理念にある通り、キリスト教を土台として歩んでいます。このことが様々な面で特色を生み出しています。例えば(私も驚いたのですが)、当院では亡くなられた患者さんを病院の正面玄関からお見送りしています。このような病院はほとんどないと思います。

当院の特色ある医療は、もちろん奇をてらってなされているわけではありません。次のような決意があるのです。「病院は病を癒す所であると同時に、人々が死を迎える場所でもあります。従来このことは無視され軽視されてきました。しかし死が宿命である以上、病院は臨死患者の心身の苦しみに正面から取り組まねばなりません。」当院の創設者の一人、森健一が遺した言葉です。病院でありながら、人の死に正面から向き合うことを決意しています。そのあらわれの一つが、正面玄関からのお見送りなのだと思います。しかし、患者さんや職員に「死を直視しなさい」と押し付けるだけであれば、それはあまりに酷です。それが自然とできるような準備や支えが必要だと思います。その役割を担っているのがキリスト教を土台としたホスピス精神です。

今から約 50 年前の 1978 年、森健一は、所属していた松山教会の平山武秀牧師から次の問いを受けました。「近い将来必ず来る高齢化社会のためにキリスト教には何ができるか。」森健一は松山の諸教会の有志達と共にこの問いに向き合い、静岡県浜松市の聖隷福祉事業団を視察し、当院と他のいくつかの施設が設立されます。設立当初から、当院では欧米のホスピス精神が大切にされました。



この欧米のホスピス精神というのは、キリスト教の信仰を土台とした死生観を持っています。つまり、死んだ後、神さまから新しい命が与えられるということ。そして神の国でみんなと再会できるということ。それらの希望を含んだ死生観です。このホスピス精神に立つ当院には、亡くなる人と見送る人とが互いに「また会おうね」と声をかけ合うことができるような気風と、取り組みがあります。死が悲しい結末から、希望への通過点へと変わることが私たちの願いです。丁寧な準備や支えの中で、職員も患者さんも正面から死に向き合うことができたかと願っています。

このようなホスピス精神やキリスト教の信仰は、終末期医療だけに関係しているではありません。高齢者のための医療や、難病の方のための医療などにも変化を与えます。例えば、患者さんの病気を見る医療から、人格を見つめる医療へ。また、医療従事者も患者さんも互いに人間であることを認め合い共に生きる医療へと変化していきます。当院では、ホスピス病棟だけでなく、どの部署でもこのホスピス精神を大切にしています。

さて、松山ベテル病院はこのように良い病院であると思いますが、満点だということではありません。職員は日々、自分たちの至らなさを反省したり、理念と現実の間で葛藤したりしながら働いています。私たちはいつも成長の途上にあります。また、今、日本は新たな時代に突入しようとしています。職員を確保したり、技術力を向上させたり、設備を新しくしたりと、様々なことに取り組んでいかなければなりません。困難な道だと思います。

しかし、聞けばこの 43 年間ずっと困難だったそうです。それでも事業を継続してこられたのは、私たちの使命が神さまから与えられているものだからだと思います。神さまからの使命を果たすために必要なものは、神さまによって不足なく与えられるというのが聖書の約束です。使命を果たしきる日までこの事業は、多くの人と神さまに支えられ継続していくでしょう。これからも松山ベテル病院とその母体である医療法人聖愛会が、教会と一緒に歩んでいけたらと願っています。